

アルプスの秋の家畜おろし アルムの夏の実りも豊かに

「牧歌」という言葉には、言葉そのものに美しいイメージがある。辞書によると「牧童が、家畜の番をしながら歌う歌」とある。

オーストリア・アルプスのケルテン州には、アルムの牧人たちが歌うこんな牧歌があり、アルプスの一夏と秋の到来を詩情豊かに歌い上げている。

わたしがアルムにいったなら

もう牧草がまっ盛り

わたしが村へもどったら

まっ白雪が降り出した

ヨーロッパの屋根といわれるアルプス山地では、高原の牧草地を求めて移動する牧畜法を「アルム牧畜法」と呼んでいる。

前記の牧歌は、そんなアルムの牧人たちの生活ぶりを、手にとるようにほうふつとさせてくれる。

このアルム牧畜法では、六月末から七月始めにかけてが最盛期で、高原の澄んだ空気の下でおいしい草を腹いっぱいむさぼった家畜たちも、九月に入って秋風が吹き始めると、山を

下りて村へ帰って行く。文字通りの収穫の秋で、アルプスやバイエルンの村々では、これを

「アルムの家畜おろし」と呼んで秋のもっとも重要な行事となっている。

牧人たちは、アルムの天候をにらみながら、夏の間で作ったバターやチーズなどを荷造りし、ほどよい日を見定めて山を下りる。そのさい、とりわけよい土産となるのは、アルムにいる間に生まれた子牛や子羊たちである。

家畜おろしの先頭を承る立派な牝牛には、頭を花の冠で飾り、体に五色の布を垂らす。その後を沢山の牝牛が、小さな花飾りをつけて従う。村人たちは村はずれまで出迎え、わが家の牛を見つけるといつせいに歓声をあげる。一同が無事に下りてしまうと、そろって教会に赴き、感謝の祈りをささげる。その後、夜おそくまで祝宴が続くのである。

